

# 中央アジアのキルギスとウズベキスタンを訪ねて (1)

為我井輝忠

長いこと中央アジアのシルクロード（絹の道）の国々を旅してみたいと思っていたが、図らずも10月（2018）に実現し、キルギスとウズベキスタンを訪ねることが出来た。当初、キルギスだけを訪問の予定であったが、一国だけでは不十分な気がして、隣国のウズベキスタンへも足を伸ばしてみた。10月13日から11月1日までの約20日間この2か国を訪ねた。

キルギスについては4～5年前まではあまり知らなかった。最初はこの国のことを「キリギス」と思い込んでいた時もあったくらいだ。ところが、ある時期、国土舘大学に留学中の学生3人と知り合う機会があり、彼らの勉学や生活面の相談を受けたり、キルギス料理を教えてもらうなどしているうちにこの国に興味を覚え、実際に行ってみようと思うようになった。調べると、日本からの直行便はなく、ソウルかモスクワあるいは中国経由になり、かなり不便である。料金を調べると、モスクワ経由がそんなに高くなかったのでアイロフロート・ロシア航空を選んだ（帰路は、ドバイ経由のエミレーツ航空となったが）。

今回の旅行には二つの目的があった。一つは第二次世界大戦後、多数の日本人兵士がソ連に抑留された後、キルギスとウズベキスタンに連れてこられて労働に駆り出されたことを以前から知っていたので、彼らの足跡を辿ってみたいと思った。もう一つは、国土舘大学に留学していた3人のうち、すでに帰国していたAdilet（アデイレット）君に会うことであった。

10月13日、成田からモスクワまで飛んだ。10数年前ヨーロッパへ行く時もモスクワに寄ったが、その時の印象は空港全体が薄暗く、何だか陰気臭いという印象を受けた。が、今回はそんな感じは全くなく、明るく、ヨーロッパの都市と変わら



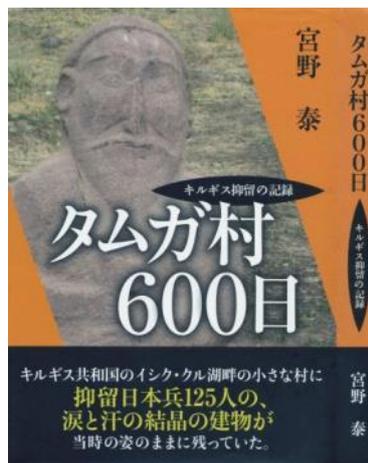
ないくらいであった。5時間の待ち合わせの後キルギスの首都ビシュケクに向かい、5時間ほどでマナス空港に着いた。到着時間は早朝6時30分であったが、空港ではあらかじめお願いしてあった旅行社のガイドが迎えに来ていて、すぐホテルに向かった。

今回の旅行はビシュケクにある日系の旅行会社にアレンジしてもらい、ガイドと共に日本人ソ連抑留者たちが労働に駆り出されたイシク・クル湖畔にあるタムガ村を訪ねることからスタートした。

1946年5月に中国旧満州から移動してきた数千人もの抑留者たちがウズベキスタンやキルギスへ到着し、その内の125名がキルギスのタムガ村へ移動させられた。彼らは建設途中のサナトリウムの建設と道路の建設に携わり、およそ2年間ここで労働に携わった。

私がこのようなキルギス抑留者の事績に興味を覚えたのは、実は2008年頃の朝日新聞多摩版で宮野 泰氏という方がキルギスでの抑留生活の体験をレポートした記事が載っていたのを読んだ記憶があったからである。その時はキルギスという国のことは記憶になく、ただ中央アジアというだけで、ウズベキスタンという国のことも出ていたという程度の記憶しかなかった。

昨年、偶然にも『キルギス抑留の記録 タムガ村での600日』という



宮野 泰著『キルギス抑留の記録 タムガ村 600日』（2013年、新潟日報事業社刊）



日本人抑留者たちが建設に携わったタムガ村のサナトリウム

本に出合った。この本の著者は宮野 泰で、私が 10 年前に新聞で知ったあの人であった。この本を読み、彼らが悲惨な当時の抑留生活にもかかわらず 2 年後誰一人亡くなることもなく全員帰国したと知った。それならば彼らが抑留されたところを訪ね、彼らが建設したサナトリウムを見たいと思った。宮野氏はこの時 20 歳で、建国大学中に召集され、旧満州奥地で 1 年間兵役についていたが、1945 年に終戦を迎え、すぐ帰国できると思っていたら、ロシアを経て、この地に連れてこられた。1947 年帰国することが出来たが、彼はその 60 年後にさらに数年経た後にもこの地を訪れた。抑留中と再訪時の記録が本書である。

10 月 14 日、ビシュケクを出発。いろいろなところを寄りながら途中 1 泊して、翌日タムガ村に着いた、ここはどこにでもあるような寒村で、特別変わったところがあるようには思えなかった。しかし、村の中央に立派なサナトリウムがあり、ここが抑留者たちによって建設された療養所だとすぐわかった。ゲストハウスに荷物を置き、早速出かけた。サナトリウムはかなり広い。広大な敷地に木々に囲まれた建物が点在し、まるで公園のようである。ガイドの案内で、見て回った。

タムガ村は冬そんなに寒くなく年間を通して温暖な気候のためここに療養所や別荘、ホテルなどあり、ソ連時代の宇宙飛行士のガガーリンもここで長期療養をしたそうで、写真がたくさん残されていた。

敷地の中央にこれまでに何

度も見たことがあるような建物があった。それが 125 名の抑留者たちが建設に携わったサナトリウムである。誰もいない。静かなところにぽつんと建っている 2 階建ての建物は 70 年前の建物そのものであった。中には入ることは出来なかった。建物の前には桜の木が何本も植えられていた。彼らは山から石を運んで来たり、コンクリートをこねたり、材木を切ったり等と慣れない仕事を 2 年間労働に携わった。このほかにも湖に出る道を整備することにした。療養所内には「抑留記念室」があり、当時の記録、写真、資料等がぎっしりと展示されていた。宮野氏のこと詳しく紹介されていた。しかし、残念ながらロシア語での説明のためあまり内容が分からないでいると、ガイドが説明してくれた。説明を聞きながら、宮野氏や彼の仲間がたどった苦労や足跡を思うと、自然と涙が出てきた。

2 年間の労働の間にも、村人との交流が多くあった。彼らから食べ物を貰ったり、中には村の女性と仲良くなった兵士もいたそうである。帰国後もそうした村の人々との思い出が長く伝えられてきた。泊めていただいたゲストハウスのタマラおばさんもそうした一人である。年齢は 60 代後半なので抑留者たちと直接接したことはないが、祖父母や両親から聞いていて、抑留者たちの生き字引みたいな方であった。宮野氏もタムガ村を訪ねた時はここに泊ったそうである。翌日詳しく話を聞かせていただいた。写真を始め宮野氏が再訪時に載った日本の新聞の切り抜きを見せていただいた。なぜそんなに抑留者たちのことに関心があるのかと尋ねたところ、「彼らは最初は大変怖い存在であ

ったが、徐々に人間的に心優しい人だとわかり、村人とも仲良くなった。そうした思い出が村人の間に残り、私の祖父母や両親からも聞かされていた」と話してくれた。

タムガ村では翌日雪が降っていた。キルギスではもう初冬であった。様々な話を思い出しながら、ビシュケクに戻った。(続く)



タムガ村のタマラおばさん